

日本発達心理学会第 20 回大会基調講演 (日本発達心理学会国際ワークショップ 公開講演会)

KL 3月23日(月) 15:30~18:00成瀬記念講堂

成人の認知発達についての縦断研究：パラダイム転換と実証研究の知見 Longitudinal Studies of Adult Cognitive Development: Paradigm Shifts and Empirical Findings

講演者：K. Warner Schaie（ワシントン大学客員教授，
ペンシルバニア州立大学 Evan Pugh 名誉教授）

老年期における認知能力低下のリスク：早期発見と介入研究 Risk for Cognitive Decline in Old Age: Early Detection and Intervention Research

講演者：Sherry L. Willis（ワシントン大学教授，
ペンシルバニア州立大学名誉教授）

司 会：岡林 秀樹（明星大学）

通訳がきます。日本女子大学人間社会学部との共催です。

（臨床発達心理士資格更新研修会 0.5 ポイント）



Schaie 教授は、シアトル縦断研究によって成人期の知的発達を 50 年以上追跡し、横断研究では成人期初期から知的低下がみられるのに対して、縦断研究においては老年期になって始めて低下がみられるということを実証的に明らかにした傑出した学者である。その研究関心は、成人期における知的発達のみならず、知的変化を捉えるための研究方法論の開発、知的変化の規定要因の研究、パーソナリティと知能の関係やアルツハイマー型認知症の原因の探求にまで踏み込んでいる。Willis 教授は、老年期における知的低下の回復・予防という、現代的に重要な介入研究の領域を主として担っている。

50 年以上も続く知的発達に関する縦断研究を成功させた両教授を、この度、日本にお招きし、シアトル縦断研究の知見と発達研究におけるパラダイム転換との関連 (Schaie 教授)、および、老年期における知的能力の低下への介入 (Willis 教授) という興味深いテーマについて御講演をお願いすることができた。

ホストとしては、成人期における発達を、実証科学的に明らかにしていくことの重要性を、シアトル縦断研究の成功例から学び、そこから学術研究と実践活動との有効な連携についての示唆も得ることができるのではないかと考えている。このことが、わが国の成人発達研究を活性化させる契機になることを期待している。

〈主著〉

Birren, J. E., & Schaie, K. W. (Eds.) (2006). *Handbook of the Psychology of Aging* (6th edit.). San Diego, CA: Elsevier.

Schaie, K. W. (2005). *Developmental Influences on Adult Intellectual Development: The Seattle Longitudinal Study*. New York: Oxford University Press.

Schaie, K. W., & Willis, S. L. (2002). *Adult Development and Aging* (5th ed.). New York: Prentice-Hall.

Whitbourne, S. & Willis, S. L. (Eds.) (2006). *The Baby Boomers Grow Up*. New York: Erlbaum.

Willis, S. L. & Martin, M. (Eds.) (2005). *Middle Adulthood: A Lifespan Perspective*. Thousand Oaks: Sage.

日本発達心理学会第 20 回大会招待講演

IL 3月25日(水) 13:00~15:00.....百 206

言語習得における機能主義的アプローチ：言語学と心理学との接点

講演者：白井 恭弘（ピッツバーグ大学言語学科）

司 会：岩立志津夫（日本女子大学）



第一言語習得 (first language acquisition) 研究には、ふたつの異なるアプローチがあるといわれている。Ingram (1989) は、この両者を language acquisition (言語習得) と child language (幼児言語) として区別し、前者は主に生成言語学的立場をとる言語学者のアプローチ、後者は発達心理学者のアプローチと考えられている (Bloom & Harner 1989)。生成言語学的アプローチは、いわゆる「言語習得の論理的問題 (logical problem of language acquisition)」を正面からとらえ、子どもがどうやって高度に複雑な言語知識を習得できるのか、という問題に関して普遍文法仮説を提示し、幼児が何らかの言語に関する知識を持って生まれてくるという生得説をうちだした。一方、幼児言語の方は、子どもがつくりだす言語の分析とその発達過程に重点を置き、それを明らかにすることに精力を注いできたため、logical problem に対する解決案という点については十分なものがなかったと言えよう。

しかし、1980年代後半のコネクショニズムの台頭以来、心理学者の側からも論理的問題に対する解決策を模索する試みがなされ、特に Elman (1993) は、単純なコネクショニストモデルが名詞、動詞、などの文法範疇、制限的制約、数の一致など、インプットから言語知識を習得できることを示すものとして注目をあびた。ただこれも、logical problem の解決策としては、習得されるべき言語知識の理論についての弱さが指摘されていた。Tomasello (2003) は、この問題を解消すべく、生成文法に代わる文法理論として構文文法 (例えば Goldberg (2003)) を採用し、子どもは生得的知識に頼る必要はなく、言語の使用パターンにもとづいて徐々に知識をつみあげ、規則を一般化することによって学習していく、という「使用依拠モデル (usage-based model)」にもとづいた包括的言語習得理論を提案している。

この両者の議論は大きく異なる前提を持って行われており、両者の間の溝は大きい。特に、

生成文法的アプローチは logical problem を解決するために、連続性の前提 (continuity assumption) を掲げているので、言語習得の初期段階から大人に近い文法知識を (生得的知識にもとづいて) 持っているという前提で研究をすすめる場合が多く、ここが大きな争点のひとつとなっている。本講演では、後者のアプローチにもとづき、具体的にいくつかの文法発達のプロセスをみていくなかで、二つの言語習得理論の利点、欠点について検討する。

略歴

カリフォルニア大学ロサンゼルス校博士課程 (応用言語学) 修了、Ph. D. 大東文化大学英語学科助教授、コーネル大学現代語学科助教授、同アジア研究学科准教授などを経て、現在ピッツバーグ大学言語学科教授。ニューサウスウェールズ大学、お茶の水女子大学、東京大学、上智大学客員研究員なども歴任、8月より名古屋大学国際開発研究科研究員。学術誌 *Studies in Second Language Acquisition* などの Editorial Board, *First Language* の Associate Editor もつとめる。現在、言語科学会 (JSL) 会長。博士論文以来続けている時制・アスペクトの習得を中心に、認知・機能主義言語学の立場から第一・第二言語習得のメカニズム解明を目指した研究をすすめている。

主な著書・論文

(主要編著書)

白井恭弘 (2008) 『外国語学習の科学: 第二言語習得論とは何か』 (岩波新書 新赤版 1150) 岩波書店

Shirai, Y. (Ed). (2007). *The Acquisition of Relative Clauses and the Noun Phrase Accessibility Hierarchy: A universal in SLA? Special Issue of Studies in Second Language Acquisition*. Cambridge: Cambridge University Press.

Nakayama, M., Mazuka, R. & Shirai, Y. (Eds.) (2006). *Handbook of East Asian Psycholinguistics: Volume 2, Japanese*. Cambridge: Cambridge University Press.

Salaberry, R. & Shirai, Y. (Eds.) (2002). *The L2 Acquisition of Tense-aspect Morphology*. Amsterdam: John Benjamins.

Li, P. & Y. Shirai (2000). *The Acquisition of Lexical and Grammatical Aspect*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Whitman, J. & Shirai, Y. (Eds.) (2000). *The Acquisition of East Asian Languages*. Special Issue of *Journal of East Asian Linguistics*. Dordrecht: Kluwer Academic.

Shirai, Y., Slobin, D. & Weist, R. (Eds.) (1998). *The Acquisition of Tense/Aspect Morphology*. Special Issue of *First Language*. Buckinghamshire, UK: Alpha Academic.

(主要論文)

Ozeki, H. & Shirai, Y. (in press). Semantic bias in the acquisition of Japanese relative clauses. *Journal of Child Language*.

Shirai, Y. (in press). Semantic bias and morphological regularity in the acquisition of tense-aspect morphology: What is the relation? *Linguistics*.

Shirai, Y. & Andersen, R. (1995). The acquisition of tense/aspect morphology: A prototype account. *Language*, 71, 743–62.

日本発達心理学会第 20 回大会記念シンポジウム

MS1 3月24日(火) 11:00~12:30成瀬記念講堂

日本発達心理学会の 20 年の歴史と今後の発展

司会：岩立志津夫（日本女子大学）
話題提供者：東 洋（東京大学名誉教授）
藤永 保（お茶の水女子大学名誉教授）
田島 信元（白百合女子大学）
指定討論者・
話題提供者：無藤 隆（白梅学園大学）
柏木 恵子（文京大学）

MS2 3月24日(火) 13:30~15:00成瀬記念講堂

日本発達心理学会の、世界そして他分野との交流を模索

司会：荘巖 舜哉（京都光華女子大学）
話題提供者：氏家 達夫（名古屋大学）
中澤 潤（千葉大学）
白井 恭弘（ピッツバーグ大学）
長崎 勤（筑波大学）
遠藤 利彦（東京大学）
指定討論者：子安 増生（京都大学）

大会委員会公募シンポジウム

AS1 (S1-N) 3月23日(月) 10:00~12:00新泉山館 大会議室

我が国における成人発達研究のこれから

企画：日本発達心理学会企画委員会
司会：岡林 秀樹（明星大学）
話題提供者：未定（3名ほど）（国際ワークショップ参加者）
指定討論者：K. Warner Schaie #
（ペンシルバニア州立大学 Evan Pugh 名誉教授）
Sherry L. Willis #（ワシントン大学教授）
通訳つき

AS2 (S1-5) 3月23日(月) 10:00~12:00百 206

時間論の視点から発達の問題を再考する —自己・他者関係の中から立ち現れる時間—

企画・司会：都筑 学（中央大学）
話題提供者：木下 孝司（神戸大学）
浜谷 直人（首都大学東京）
白井 利明（大阪教育大学）
指定討論者：加藤 義信（愛知県立大学）
間宮 正幸 #（北海道大学）

AS3 (S5-5) 3月25日(水) 10:00~12:00百 206

文化間移動から発達を問い直す —乳幼児期から老年期まで—

企画・司会・話題提供者：塘 利枝子（同志社女子大学現代社会学部）
企画・話題提供者：鈴木 一代（埼玉学園大学人間学部）
小澤理恵子（山梨大学教育人間科学部）
話題提供者：廿日出里美 #（安田女子短期大学保育科）
指定討論者：東 洋（東京大学名誉教授）
やまだようこ（京都大学大学院教育学研究科）

発達障害児のものの見方

—注意の心理学課題からさぐる発達障害児の認知—

企画・司会：金沢 創（日本女子大学人間社会学部）
企画：山口 真美（中央大学/科学技術振興機構さきがけ）
話題提供者：藤井 靖史#（帝京大学医学部）
日比 優子#（中央大学/産業技術総合研究所）
山下裕史朗#（久留米大学医学部）
指定討論者：小西 行郎（同志社大学大学院文学研究科）

日本臨床発達心理士会企画シンポジウム

（臨床発達心理士資格更新研修会 0.5 ポイント）

CS1 3月23日(月) 13:00~15:00成瀬記念講堂

「臨床発達心理学」の構築に向けて

企画：日本臨床発達心理士会
司会：本郷 一夫（東北大学）
話題提供者：麻生 武（奈良女子大学）
無藤 隆（白梅学園大学）
岡本 夏木（元京都女子大学）
指定討論者：子安 増生（京都大学）

CS2 3月25日(水) 13:00~15:00成瀬記念講堂

保育・教育現場における臨床発達支援のすすめ方

企画：日本臨床発達心理士会
司会：金谷 京子（聖学院大学）
話題提供者：岩立 京子（東京学芸大学）
柴崎 正行（大妻女子大学）
鯨岡 峻（中京大学）
指定討論者：秦野 悦子（白百合女子大学）

企画委員会主催講習会

WS1 3月23日(月) 13:00~15:00……………百201

初年次教育における教育目標とそれを達成する方法論

講師：藤田 哲也（法政大学）

司会：松岡 陽子（大同工業大学）

内 容（講師より）：

近年、主に大学新生を対象として行われる、初年次教育の重要性が高まってきている。多くの大学が何らかの形で初年次教育を展開しているが、中には不適切な教育目標を設定していると思われるケースもある。また、「何を教えるべきか」に大学側・教員側の意識が集中してしまい、「どう教えるべきか」についてまで議論が及んでいないことも多い。

本講習では、初年次教育の概念・定義を簡単に整理し、教育目標の在り方を考える際の枠組みを提示する。その上で、その教育目標を達成するための方法論の一つについて紹介する。講習の中では、参加者自身に学生役を務めていただき、実際に授業の一部を体験してもらうことで、「気づき」と「振り返り」の重要性についての理解を深めてもらう予定である。

以上の趣旨を踏まえ、できるだけ途中入室や途中退室を避けていただければ幸いです。

WS2 3月24日(火) 15:30~17:30……………百201

ウェクスラー知能検査の展望

講師：大六 一志（筑波大学）

司会：山本真由美（徳島大学）

内 容（講師より）：

特別支援教育の進展に伴い、個の特性を把握する道具としての知能検査の重要性も高まってきた。

中でも最もよく用いられているのが、WPPSI, WISC, WAISなどのウェクスラー知能検査である。現在日本ではWPPSI, WISC-III, WAIS-IIIが用いられているが、アメリカでは2002年にWPPSI-III、2005年にWISC-IV、2008年にWAIS-IVが刊行され、日本でも1~2年以内の刊行を目指してWPPSI-III, WISC-IVの標準化が進められている。

この改訂により、言語性IQ、動作性IQが廃止され、また、おなじみの下位検査のいくつかも新しいものに置き換えられる。今や知能検査には、IQ以外のより役に立つ情報が求められるようになってきているのである。

そこで本講習では、新しいウェクスラー知能検査の内容およびその意図について説明し、知的能力の心理査定が目指すべき方向性を明らかにしたい。

映画と講演

FL1 3月23日(月) 11:00~12:30成瀬記念講堂

映画「心理学者原口鶴子の青春
—100年前のコロンビア大留學生が伝えたかったこと」

FL2 3月24日(火) 12:30~14:30新泉山館大会議室

「発達・教育心理学史の中の原口鶴子」

講演者：本間 道子（日本女子大学）

映画「心理学者原口鶴子の青春
—100年前のコロンビア大留學生が伝えたかったこと」

FL3 3月24日(火) 18:00~20:00成瀬記念講堂

司会者：本間道子（日本女子大学）

挨拶：岩田正美（日本女子大学現代女性キャリア研究所所長）

「原口鶴子に魅了されて」

講演者：泉 悦子（テス企画）

映画「心理学者原口鶴子の青春
—100年前のコロンビア大留學生が伝えたかったこと」

一般公開 日本女子大学現代女性キャリア研究所共催

FL4 3月25日(水) 11:00~12:30成瀬記念講堂

映画「心理学者原口鶴子の青春
—100年前のコロンビア大留學生が伝えたかったこと」